

9月号

担当：田中

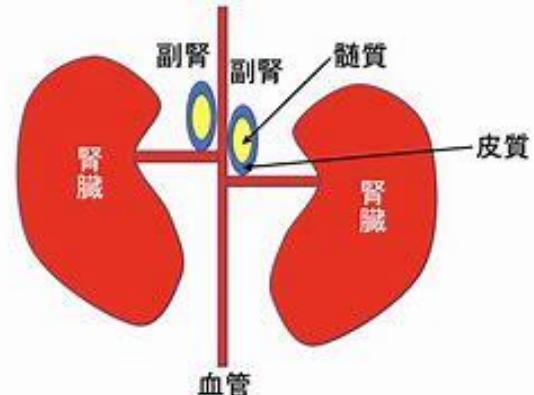
わんにゃん通信

今回は 犬のクッシング症候群 についてです。

クッシング症候群とは？

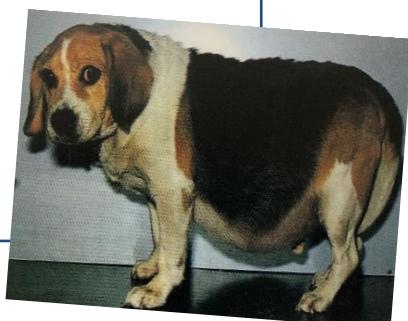
別名「副腎皮質機能亢進症（ふくじんひしきのうこうしんしょう）」といいます。副腎の皮質という部分から分泌されるコルチゾールというホルモンが過剰になることにより症状が現れます。

「副腎」は、腎臓のすぐ近くにある臓器です。落花生のような形をしていて、左右に1つずつあります。非常に小さい臓器です。



症状は？

- 尿が増える(回数や量が増えて色が薄くなる。)
- お腹が膨らむ
- 飲水量が増える
- 食欲が異常に増える(食事を異常に欲しがる。)
- 毛が薄くなる・抜ける・皮膚感染症が治りにくい
- 筋力の低下(動きが鈍くなる、散歩を嫌がる)
- 皮膚が硬くなったり白っぽくなったりする(石灰沈着)
- 皮膚が薄くなる(血管が透けてみえる)
- 深い眠り(嗜眠:強い刺激を与えなければ目を覚まさない)



原因は？

下垂体の腫瘍： 良性腺腫によるものが多く全体の 85%を占める脳下垂体は ACTH（副腎皮質刺激ホルモン）というホルモンを出します。ACTH は副腎にコルチゾールを分泌させます。脳下垂体に腫瘍ができることで ACTH が過剰に出てしまい、副腎からのコルチゾールが出過ぎてしまいます。

副腎の腫瘍： 腺腫、腺癌が半々で全体の 15%をしめる

視床下部や脳下垂体の機能は正常であるにもかかわらず、副腎そのものが腫瘍化してしまうことで副腎皮質刺激ホルモンに関係なくコルチゾールが過剰に分泌されてしまいます。



診断

一般的な血球検査、血液生化学検査のほかに

特殊検査：ACTH 刺激試験、低用量デキサメサン抑制試験が主流です。
血液中のコルチゾールの濃度を測る検査です。

エコー検査：左右の副腎の大きさや形を診て副腎の腫瘍化や腫れを見ます。

MRI 検査：下垂体の大きさや形を見て腫瘍かどうかを診ます。

治療

◆ 脳下垂体に腫瘍がある場合にはその腫瘍の大きさによって治療がかわっていきます

①脳下垂体の腫瘍が小さいときは、飲み薬で副腎から分泌されるコルチゾールを抑えます。

(内服して症状が落ち着けば治療終了というわけではなく、基本的には継続して内服し続けていく生活になります。)

②脳下垂体の腫瘍が大きいときは、放射線治療で腫瘍を小さくしてから必要であれば

飲み薬で副腎から分泌されるコルチゾールを抑えます。

◆ 副腎に腫瘍や癌がある場合には、手術により摘出することもあれば、内服での治療で維持する場合もあります。

クッシング症候群は中齢から老齢のワンちゃんが発症することの多い病気です。

一度発症すると完治が難しい疾患でもあります。

早期に発見できれば他の病気を併発するリスクを軽減できる可能性があります。

少しでも気になる症状がある時は早めにご相談ください。

